

## 第2章

# ロシアの乱暴と山崎半蔵の宗谷警備

(宗谷詰合山崎半蔵日誌 三、四、五、六、七、八より)

## 1. ロシア船あらわる

長年蝦夷地に詰め、膨大な日誌を残した津軽家書院番山崎半蔵は、文化4年(1807)春、択捉島詰を命じられ、4月5日(1807.5.12)弘前を出発した。

日和待ちののち、同11日朝青森を出帆し、箱館に向ったが、その夜半の大風により遭難し、翌12日松前付近のサッカリ(札苅)に漂着した。この時、乗船していた下級藩士61名のうち3名を亡くした他、武具一切を失い、数日札苅に足止めされることになった。

「御番所ヨリ御呼出ニ付 罷出(マカリイデ)シニ西夷ソウヤ。シャリ辺ノ灘へ 阿魯西阿船(オロシアセン)掛リ居リ村々心遺ヒ何トナク物騒ノ由追々相達スルノ間

人数(下級藩兵)引キ連レ 仕度次第早々出立 先ツソウヤヘ出張リアルヘシ」

16日、箱館に到着するとすぐに、西蝦夷地宗谷へ転進の命を受ける。

この文化4年3月24日、露寇対策のため幕府は宗谷、樺太を含む西蝦夷地を松前藩より召し上げ、直轄地とした。これで、寛政11年(1799)から直轄となっていた東蝦夷と合わせて、全島が幕府直轄となった。

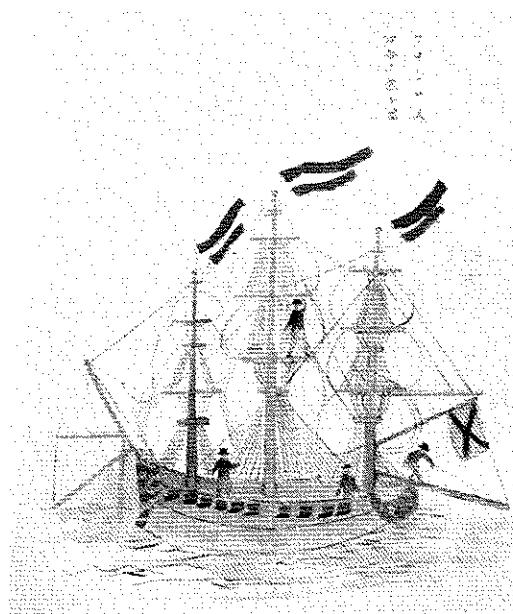
近海にロシア船が出没し、この頃蝦夷地には、不穏な空気が流れていた。

18世紀ロシアはラッコの毛皮を求めてオホーツク海を南下し、北千島、中部千島を支配していた。ラッコの毛皮は、当時最高級品として、主にヨーロッパで需要が高かつた。ロシアはこのラッコ猟のための食糧、燃料を確保する為、日本と通商条約を結ぼうと、寛政4年(1792)シベリア総督の使節アダム・ラクスマンを日本に送った。ラクスマンは日本人の漂流者大黒屋光太夫と、その他の伊勢漂流民を伴い、根室を経て箱館に着いた。

時の老中松平定信は、漂流民の送還についてはロシア使節の対面を尊重して引き取ったが、鎖国を理由に通商については辞退した。ただ、個人的に通商を容認する考えをもっていた定信は、ロシア側に対し、今後もし外交交渉を望むのであれば、長崎にだけなら入港してよいという「信牌」(許可証)を与えた。

その後文化元年(1804)9月6日ロシア皇帝アレクサンドル一世の侍従長であり、国策会社「露米会社」の総支配人であるニコライ・レザノフが通商を結ぶため再び日本に派遣されて来た。

「露米会社」とは、帝政ロシアがイギリスとオランダの「東インド会社」に倣って、千島列島、樺太、アリューシャン、アラスカ、カリフォルニアに及ぶ北太平洋の開拓のために1799年7月勅令によって設立した会社である。ロシアは、近代国家としての領土に対する野心のほかに、この広大な地域



ロシア船(北夷談)

で獲れるラッコやオットセイの毛皮が生み出す莫大な利益に惹かれていた。しかし、これに必要な一切の物資を遠くヨーロッパから運ぶことは事実上不可能であり、その悩みを解決するためには、なんとしても日本と通商条約を結び、物資を供給してもらう必要があった。

レザノフは、航海家クルーゼンシュテルンの世界周航の計画に便乗するかたちで、仙台若宮丸の漂流民津太夫らを伴って長崎に入港した。レザノフは例の「信牌」を携えていたが、それにもかかわらず、幕府は通商を認めなかった。「信牌」を与えた松平定信は、既に老中を退いており、以前にくらべ幕府は外交政策に対して消極的になっていた。津太夫らを送還してきた好意も、アレクサンドル一世からの將軍あての親書も空しく、レザノフ一行は半年間長崎に留め置かれたあげく文化2年(1805)3月19日、日本を後にしなければならなかった。

レザノフはどうしようもない失望と憤懣をいだいていた。これでは皇帝に対して面目がたたないばかりか、ロシアでの自分の立場が危うくなる。このまま終わるわけにはいかなかった。

レザノフ一行はこのあと日本海を北上し、ノシャップ岬に上陸した後樺太へ向かう。ロシア政府から樺太の交易の実態や、それに対する日本政府の方針などを調査するように指示を受けていたレザノフとクルーゼンシュテルンは、ここで日本人の役人や、大阪からやってきた北前船の乗組員たちと接触している。クルーゼンシュテルンは資源豊かな、しかも警備の薄い樺太を奪取しようと考へるが、それはレザノフの考へとは合わなかった。一軍人であり、一航海家であるクルーゼンシュテルンと違い、露米会社の総支配人という立場にいるレザノフは、今樺太そのものを手に入れようも、日本とその周辺に軍事的压力をかけてロシアの国力を見せ付け、それにより通商を開かせるほうが、国益のためになると考へていた。

その後一行を乗せたナデージュダ号はカムチャツカへ行き、ここでレザノフはクルーゼンシュテルンと別れる。クルーゼンシュテルンは、再び樺太調査に向った。レザノフはこのカムチャツカで、海軍中尉フヴォストフ、その友人ダヴィドフと嬉しい再会をする。二人は共に軍人でありながら露米会社に雇われている身だった。彼らは露米会社の持ち船マリア号に乗り込んで、アラスカへ向かった。

ここでいよいよレザノフは日本襲撃の準備を始める。彼は途中立ち寄ったアリューシャン列島のウラナスカ島から、皇帝アレクサンドル一世に上奏文を送った。

「私は日本を攻撃します。攻撃すれば日本はロシアと通商を結ばなければならなくなります。それはロシアに利益をもたらします」とレザノフは上奏文に書いている。レザノフはこの時点でフヴォストフとダヴィドフに日本攻撃の意思を伝え、二人も同調していたとみられる。上奏文にも二人を「協力者」と書いている。レザノフはこのあとアラスカでユノナ号、アヴォス号という二隻の軍艦を手に入れ、アレクサンドル一世の返事を待たずに、フヴォストフとダヴィドフに日本襲撃の命令を出す。

文化3年(1806)9月15日、ユノナ号はオホーツク港に入港した。ここからレザノフは皇帝に事の次第を報告するため首都ペテロブノレクに向う。これがレザノフとフヴォストフとの永遠の別れになった。かねてから健康を害していたレザノフは、雪の中を進むうちクラスノヤルスクで薨れ文化4年(1807)3月失意のうちに亡くなる。43歳だった。

フヴォストフとダヴィドフはレザノフの死を知らない。しかし命令は生きていた。忠実なフヴォストフとダヴィドフは二隻の軍艦に乗って樺太、択捉、宗谷の海域で略奪行為を繰り返すことになる。

文化3年9月11日、当時松前藩の管轄だった権太のオフィトマリに上陸したフヴォストフは、アイヌ1人を捕らえ、その家に占領を意味するロシア語を刻んだ真鍮の板を掛けて去った。翌12日、久春古丹沖に投錨したフヴォストフはポートで上陸し、運上屋などを襲ったうえ、そこに居た番人、富五郎、酉蔵、福松、源七の四人を捕虜にした。

この事件があった時、久春古丹詰の松前勤番士卒は冬が近づいていたため、引き揚げたあとだった。そのため情報が遅れ、翌文化4年3月4日になってから、この年から権太を含む全蝦夷地が幕府直轄になることを知らずに、権太白主に渡った松前藩の権太勤番柴田角兵衛が、白主の乙名アニシケより事件を知らされた。柴田角兵衛は慌てて宗谷に戻り、飛脚をもって松前藩に知らせたが、既にその時には、権太は幕府の直轄になっていた。

事件が幕府の箱館奉行羽太正養(ハブトマサヤス)に知らされたのは、4月10日になってからだった。羽太正養は、ロシアに対応する最大の要地は宗谷であるとして、当時箱館付近に駐屯していた津軽藩兵に、箱館奉行調役並深山宇平太、同下役小川喜太郎を付け、宗谷警備に当たらせると共に、東北諸藩に西蝦夷警備を命じたのだった。

半蔵が物頭代(隊長の代理)。隊長は貴田十郎右衛門という者だったが、彼は8月28日になってから、宗谷に着任する。半蔵はそれまでの代理だった)となった隊は4月16日に宗谷転進を命じられていたが、遭難によって武具などが失われていたため、出発に手間取り、19日、伊東友衛率いる兵卒25人、20日に藩医佐々木元龍率いる25名を見送った後、5月15日になってから、やっと宗谷へ向け出発する事ができた。

## 2. 狼籍を続けるロシア船

4月24日、ユノナ号とアヴォス号は択捉島のナイホ(内保)にあらわれ、運上屋、番屋を襲い、番人、五郎次、左兵衛、長内、六蔵、三助の五人を捕虜とした。続いて29日、2隻はシャナ(紗那)にあらわれた。

当時幕府は紗那に、択捉島の諸機関の元締めである会所元を置いていたため、幕府役人の他、勤番の津軽、南部両藩の藩士。医師、番人、技術者など、多くの人々が働いていた。これらの人々の中に、幕府に雇われ、択捉島の測量と新道の開削工事に従事していた、間宮林蔵がいた。

林蔵は雇医師久保田見達と共に、徹底抗戦を主張するが、箱館奉行調役下役戸田又太夫と下役関谷茂八郎には戦意がなく、ロシア側が3隻の短艇で上陸を始めると、会所の支配人川口陽助に命じて、ロシア人と交渉させようとした。しかしロシア側はこれを無視し、いきなり陽助の股を撃ちぬき、付き添いのアイヌをも撃ち殺してしまう。さらに海岸にある魚粕倉庫を占領し、そこから会所に向けて大砲、小銃を放った。

交渉するつもりだった戸田又太夫と関谷茂八郎は激しく動搖し、津軽藩も恐怖のため、みずから陣屋に火を放ち、これを焼き払った。

夕暮れになり、ロシア兵はいったん母船に引き揚げた。

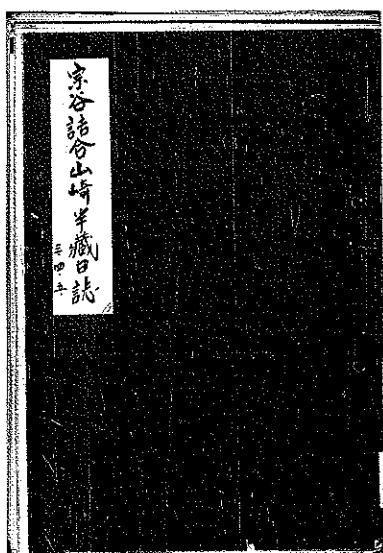
その夜、戸田と関谷は、紗那からルヘツ(留別)まで撤退することを決め、夜が明けないうちに紗那を後にした。この逃避行の途中、責任を感じた戸田又太夫は山中で自害している。

ロシア兵は、この後も翌日、翌々日と再び上陸し、略奪の限りをつくし、負傷して他の者と共に退却できずにいた南部藩火薬業師(大砲役)大村治五平を捕虜として、5月3日、ようやく紗那から立ち

去った。

この紗那襲撃事件は大きな波紋をよんだ。会所を捨て逃亡したことで、幕府は世間から非難を受けることになった。押搾島にいた役人達は、保身のため虚偽の報告をする者が多かったが、時間の経過と共に、本当のことが判ってくると、幕府を揶揄する者まで現れた。江戸の知識人、支配階級の一部に、国家的恥辱と受け止められたとも言われている。後に、この事件に関わった役人達は幕府により厳しく処分された。

この紗那襲撃事件は間宮林蔵の魂にも深い傷を残した。怖気づいて逃げた訳ではなく、身分が低かったために、徹底抗戦を主張したが受け入れられなかったのだ。しかし、この時の戦わずに逃げたという事実は、後の林蔵の人生を大きく変えるものだった。林蔵はこの悔恨を原動力にして、後の権太探検を成功させる。



宗谷詰合山崎半蔵日誌

フヴォストフとダヴィドフの略奪はさらに続く。この後再び南権太に姿をあらわした後、5月29日宗谷沖にて、松前商人伊達林右衛門所有の「宜幸丸」(ギコウマル)に向って大砲、鉄砲で射撃したうえ、米、酒、塩、衣類などを奪った。乗組員は伝馬船で逃げるが、「宜幸丸」は焼き払われた。

6月4日(1807.7.9)、マシケ(増毛)まで來ていた山崎半蔵のもとへ、宗谷から飛脚船が来る。飛脚船は宗谷詰の深山宇平太からの「異国船見得候間 急キ参ラルベク」という書状を携えていた。

この日から、徹夜の行軍が始まる。5日早朝にヲニシカ(鬼鹿)に到着。6日早晩にはテシオ(天塩)に着いた。天塩で思わぬ事がおきる。

「明ケレハ六月六日 東雲(シノノメ)ノ頃ナリシ 表物

騒シ何事ソト尋ヌルニ ソウヤは赤人(ロシア人)ニ打崩サレ 生残リシ御役人様方登リノ由」

宗谷がロシア人に襲撃され、生残った役人が来ると言う注進があった。磯に出て待っていると、幕府役人村上左金吾が家来10人ばかりを連れてやってきた。村上左金吾は齢36、7。甲冑に身を包み、白練り絹の鉢巻から、乱れた髪がこぼれている姿は、絵巻に描かれているような美しさだった。左金吾は、宗谷は壊滅的な被害を受け、生残った者は皆捕虜になったから、半蔵にこれからひき返し、石狩近くのアツタ(厚田)領の勤番をするようにと命じた。

「御下知ヲ背クニ似テ恐入り侯得共(ソウラエドモ) 私儀ハ是ヨリソウヤヘ急キ参リ当家御人数(津軽藩士達)ノ死跡見届ケテ帰ラ子ハ 弘前役人へ対シ申訳相立ズ侯」

半蔵は、この目で宗谷の状況を確認しなければ、国許に顔向けが出来ないと断った。

「生捕ラレナハ 貴様ノ恥難儀ハ兎モ角 天下ノ恥ナリ」

左金吾は、今宗谷へ行けば、必ずや捕虜になる。それは幕府の名に泥を塗る事だと言う。しかし半蔵は聞かない。自分は宗谷詰の深山宇平太様より、早く来るようにとの書状を受け取っているし、自分の隊は優秀ですから、宗谷へ行ってロシア人と一戦交えます。などと言う。それに対し左金吾

は「貴様ノ如キ分リ難キ人ハ談論もナラヌ」と、腹立たしさを隠さない。左金吾は前日官船に乗ってヲファニシヤに停泊し、その時西の空が赤く燃えているのを見た。その前に大砲の音がひっきりなしに聞えていたので、てっきり宗谷が焼き払われたと思い込んでいた。

ヲファニシヤとは、天塩より八里と言われ、稚咲内のやや北にあった。今では地図上から消えてしまっているが、江戸時代には番屋があり、アイヌの集落もあった。旅人が足を休める場所でもあった。しかし、ヲファニシヤから見て西にあるのは、リイシリ(利尻)レフンシリ(礼文)であって、宗谷が燃えていても、ヲファニシヤからはよく見えないはずである。左金吾は恐怖のあまり、冷静さを欠いていたのだろう。

この時襲われていたのは、利尻に停泊中の官船「萬春丸」だった。ユノナ号とアヴォシ号は、「萬春丸」から大筒などの武器のほか、米、酒などを略奪し、さらに松前商船「誠竜丸」からも積荷を奪ったあげく、両船を焼き払った。そして翌6月5日利尻島に上陸し、かねてから捕虜にしてあった10人のうち8人に短艇を与えて釈放し、一通の書簡を持たせ、奉行所に届けるようにと命じた。残る2人の捕虜は、通詞とするために、なおも抑留した。

左金吾にかまってなどいられなかった。一刻も早く宗谷に向わねばならない。半蔵は、左金吾の船の船頭を刀に手を掛けて脅し、無理やり宗谷へと向かわせた。

左金吾は天塩の砂浜に置き去りにされた。

二日間にわたる徹夜の強行軍で疲れきった身体に、船の揺れは心地よかつた。

### 3. 宗谷での藩士達

6月7日(1807.7.12)の昼前、山崎半蔵率いる津軽藩士は宗谷に到着した。

宗谷では、箱館奉行調役並 深山宇平太、調役下役 小川喜太郎、先に到着していた伊東友衛などの津軽藩士達が出迎えた。宗谷は焼き払われてなどなかった。

「御人数居小屋ノ方ヲ見シハ 房付ノ御旗(フサツキノミハタ) 手長ノ旗ニ流風ニ翻リ勇々シク  
小屋ニ入りテ見渡セハ 諸土ハ勿論足軽モ 甲冑差シ貫ニ仕掛け 敵ヲ待居ル躰」

勤番所には、津軽家紋所の杏葉牡丹(ギョウヨウボタン)の染め抜かれた幔幕が張り巡らされ、陣屋の方を見ると、房の付いた旗や幟が立て並べられ、風に翻っていた。また、幟の脇には、「刺又(サスマタ)」「突棒(ツクボウ)」「袖がらみ」といった捕り物道具まで立て並べてあるといった物々しさである。

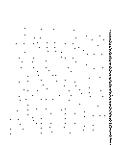
藩士達は皆甲冑を身に付け、敵を待ち構えている様子で、深山宇平太にいたっては、陣羽織をまとったうえに、甲冑の背に「不動如山」と、素晴らしい字で書かれた旗指物まで差し、まるで戦国武将のようないでたちである。

しかし弾除けの土手はなく、砲台は巖島神社の背後の高台(現在の宗谷小学校)にあり、やや遠い。

半蔵は早速深山宇平太と小川喜太郎の二人から、先日からのロシア船による襲撃の様子などの報告を受けた。

半蔵が、前日の村上左金吾とのやりとりを話すと、二人は顔を見合させ、「それは面白ありません。でも、他の幕府役人は、村上左金吾とは違いますよ」と言って笑った。

紗那事件の事もあり、幕府の役人が皆臆病者だと思われるのが、二人には心外だったのだろう。そんな話の直後、沖合いにロシア船が見えたとの注進があった。



到着したばかりの半蔵と藩士たちが、慌てて甲冑を身につけ、様子をうかがっていると、さらにロシア船は近づいて来る様子である。大砲方は弾を仕掛け、船が近付いて来た頃に撃ち放とうと、火蓋を切っている。藩士達は大急ぎで弾除けを築き、上陸を待って応戦しようと、息を詰めてロシア船が来るのを待った。

しかし、待っていたにもかかわらず、ロシア船は宗谷岬をかわして去って行った。強風で入津出来なかつたのだろうということになり、ひとまず休憩になった。

陣屋の中にはいり、半蔵は藩士達を励ました。「押提島の紗那で傍若無人に振るまい、日本人を赤子の如く思っているロシア人など、陸へ引き揚げて皆殺しにするべし」、この言葉に、皆々々に同調し、藩士達全員に士気がみなぎつているかのように見えた。

「今夜予風呂ニ入りシ居リシニ 暗キ所ヘ誰カ人ノ来ル様ナリシカハ 誰ソト問ニ私ナリト小ニ答ヘ側ヘ寄リ誰某ナリ 私痴氣(センキ)ニテ難儀ニ付明日ハ別段ノ思召ヲ以ッテ炊出シ方ヘ相廻リ侯様奉願トノ事ナリ」

その夜、湯殿の陰でひとりの藩士が半蔵を待っていた。藩士は半蔵の傍へ来て、身体の具合が悪いので、明日は炊き出し方へ役目を変えてください、と言う。身体の具合が悪いのならば、なぜ先程勤務割りをした時に、申し出なかつたのかと半蔵は訊(タズネ)たが、それには答えず、藩士はただ「何とぞ御慈悲を」と言うばかりである。士気が高まっているかの様に見えた藩士達の、思惑はひとつではなかつた。内心恐怖に脅えていた者がいても不思議ではない。

ユノナ号は206トンで、砲門のあるフリゲート艦である。アヴォス号もそれに近かつたと思われる。この2隻の艦は、それぞれ3本のマストに14、5枚の帆をあげ、旗なども夥(オビタダ)しく翻し、その姿は藩士達を圧倒した。この藩士は、とても戦う事など出来ないと思ったのだろう。周りで打倒ロシアの気運が高まっている時に、炊き出し方へ廻してくださいと言うのも、それはそれで勇気がいることだった。

この藩士が炊き出し方へ廻されたか、日誌には書かれていながら、半蔵は翌朝、名前は伏せたうえで、藩士達にこの出来事を報告している。

そこで「男子ノ軸ナキ(臆病者)ハ見苦シ 況や帶刀以上ハ恥ベキ事ナリ 昨夜ノ人ノ如キハ 臆スルニ似タリ」と厳しく言い、「手柄ヲ顯シ 死ナント心掛ヨ」と、一同を励ました。

話は前後するが、半蔵達が宗谷に到着する前日の6月6日、利尻島で解放されていた捕虜、南部藩士大村治五平、長内、六蔵、三助、富五郎、酉蔵、源七、福松八名が宗谷に着いていた。彼等は、ロシア側から幕府に宛てた手紙を携えていた。手紙の内容は、「先年レザノフ一行を長崎から追い返した非礼を怒り、このまま通商を許可しなければ、北の地を攻撃する。しかし通商を許可するのであれば、以後友好を心がける。」というものだった。調役下役の小川喜太郎は自ら願い出て、大村治五平ら8人に付き添い、同月11日箱館まで行き奉行所に報告をした。さらにその後江戸で幕府から尋問を受ける事になる。

幕府内ではこの時、紗那事件の後といふこともあり、通商を認めようという者より、徹底抗戦を主張する者が多かった。通商を認めない以上、ロシア側が攻めて來るのは必定である。いつロシア船が現われても対応出来るように、越冬して警備する必要があると、考えられた。

宗谷ではこれまで以上に緊張が増したが、ロシア船はこの後ついに現れることはなかった。

命令を下したレザノフはすでに前年亡くなっていた。フヴォストフとダヴィドフは、6月11日オ

ホーツク港に引き揚げたところを、同地の長官ブハーリン海軍大佐によって逮捕された。「二人の日本における略奪行為は、ロシアの国益に反する。日本がもしオランダに援助を求めるなら、北方に三艘しか武装船のないロシアは危険にさらされる」と、ブハーリンはシベリア総督ペーステルに報告している。

レザノフの命令に忠実に従い、国益のために手柄をたてたと思い込んでいたフヴォストフとダヴィドフは仰天した。彼らは8月16日脱獄をはかり、ヤクーツクまで行き、そこから露米会社と政府に対し、自分たちの無実を訴える運動をする。

その後フヴォストフとダヴィドフは第二次スウェーデン戦争に志願し、それを受け入れられた。フヴォストフは、そこで手柄をたてて罪を赦され、なおかつ褒賞を得る。しかし、彼らは間もなく最期の時をむかえる。

1809年晚秋のある日、フヴォストフとダヴィドフは、二人揃って知人宅に招かれた。深夜、酒を飲んでの帰り道、首都のネヴァ川に架かっている橋を渡ったところ、橋が壊れるという事故にあい、二人同時に川へ落ち溺死した。つねに一緒に人生を歩んできた無二の親友だった二人は、死の時もまた一緒だった。

日本襲撃の中心人物たちは、もう二度と日本の近海に姿をあらわす筈がなかった。しかし日本側は誰もそのことを知らない。来るはずのないロシア船を、山崎半蔵をはじめとする藩士たちも、幕府の役人たちも虚しく待ち続けた。

#### 4. 寒さとの闘い

北国宗谷の夏は瞬く間に過ぎて行く。津軽藩の駐屯は、当初8月末か9月頃までと思われていたが、宗谷に到着して暫くすると、明年3月まで警備を続けるようにとの命を受ける。宗谷には下級藩士のための陣屋は2棟しかなかった。秋までの駐屯ということだったので、それまで陣屋に入りきらない藩士達は、アイヌの家や、魚小屋に手を入れたところで暮らしていた。しかし越冬するとなればそれでは都合が悪い。そこで急遽越冬のための陣屋を建てる事になった。

建てる場所を決め、草を刈り始めると、ここには墓所があるからと、アイヌの人達からの反対にあい、最終的に敷地に決まったのはパラキオマナイだった。

パラキオマナイとは、アイヌ語で「ダニ多き沢」そんな場所しか土地が空いてなかつたが、しかたがなかつた。早く取りかからなければ、冬が来てしまうのだ。

さっそく木材が伐り出され、製材が始まった。当時宗谷には、製材を専門にする者や大工もいたが、それでも藩士全員で取り組まなければ、間に合わない。

藩士達の越冬陣屋の柱が漸く建ったのは8月12日(1807.9.13)、この4日後の16日には初霜が降り、28日には宗谷に初雪が降っている。

8月28日は、今の暦では9月29日。ずいぶん早い冬将軍の到来である。そんな寒さの中、陣屋が出来あがったのは11月10日(12.8)で、外はもうすっかり根雪に埋まっていた。

「急ギ鹿末(ソマツ)ナル普請ダモ 漸ク今仕廻ヘリ」と半蔵はその日誌に書いている。しかし、粗末なのは仕方がないとしても、その建物は純日本建築で、戸や障子があり、床下があった。日本の建物は、夏の湿気を考えてどんな粗末な家にも必ず床下を造り、風の通りを良くしていた。しかし宗谷では、湿気より冷気のことを考えなければならない。アイヌの家のように、囲いをしたら床など張らずに柴や萱を敷いた方が、はるかに防寒のために良いのだった。

雪の中での慣れない大工仕事は過酷だった。しかも秋に帰る予定だった藩士達には、防寒着どころか、着替えもないありさまだった。また夜具もなく、このままで冬の夜をどうやって過ごせばいいのか。7月9日(1807.8.12)に入津した官船が、藩士達の着替えや古着などを積んできていたが、それでは間に合わず、なんとか藩士全員に行き渡らせようと、箱館や松前に手配をしてはみたが、この年の蝦夷地には、東北諸藩の藩士達が数多く駐屯していたため、古着や夜具など払底(フッティ)していて、容易に手に入る状態ではなかった。これでは、厳しい宗谷の冬を、乗り切る事は到底できない。

山崎半蔵は、宗谷での越冬には反対だった。宗谷から、比較的温暖なマシケ(増毛)やルルモッペ(留萌)まで戻って越冬するべきと考えていた。半蔵には辛い記憶があった。

文化2年5月13日、択捉詰の命を受け、同地へ赴いた半蔵はこの世の地獄を目撃する。択捉島には前年より、津軽藩士51名が駐屯していたが、半蔵が着任したその時生存していたのは僅か13名、しかもその生存者のうち6名が瀕死の状態で、死亡した藩士達は、人手不足と凍土のため、埋葬されることなく、菰(コモ)に包まれたまま陣屋の台所に積み上げられたままになっていた。その後危篤状態だった6名も亡くなり、結局51名中生きて帰れた者は、僅か7名だったのだ。半蔵はその轍を踏んではならないと考えていた。寒冷地での越冬を甘く見ていたら危険である。

しかし幕府は、あくまでも越冬して警備する事にこだわっていた。4月の紗那襲撃事件は、国を揺るがす程の騒ぎになっていた。戦わずして会所を放棄した戸田又太夫ら幕府役人に非難は集中し、江戸では幕府を揶揄する者や、国政に口を出す者さえ現われはじめた。幕府にとって、これはまずいことである。

国学者の平田篤胤は、徹底抗戦を主張したが、蘭学者杉田玄白は、ロシアとの戦争を避けるためには、開港が必要と説き、開港したうえで軍事力を強化すべきとした。

前老中松平定信はロシアが狼籍を謝罪したうえで交易を願い出るならば、これを容認してもよいとする意見書を出していた。やはり今の日本には、ロシアに対抗し得るほどの軍事力はないとしている。

しかし、幕府は開国するつもりはなかった。紗那での雪辱をはたすべく、ロシアが攻撃を仕掛けてきたならば、幕府の威信をかけても、これを打ち碎く……という姿勢だけでも見せる必要があると考えた。自分たちの面子のためだけにである。

威光を保つためには、多くの犠牲をも厭わないとする幕府の姿勢に、深山宇平太は強い反発をおぼえ、越冬に反対した。

9月27日、西蝦夷地警備の総指揮にあたっている、箱館奉行吟味役鈴木甚内が宗谷に赴任してきた。幕府と現場との板挟みになった甚内は、リヤコタン(富磯)に陣屋を移してはどうかとの案を出す。

当時のリヤコタンは今より遙か沖に海岸線があったと言われている。風当たりも弱く、宗谷のアイヌは、冬になるとリヤコタンに住居を移していた。それでも宇平太は承服しない。困惑した甚内は、宇平太を説得するようにと、半蔵に命じている。

当初ロシア船を打ち沈もうとする気概に燃えていた宇平太だったが、今では津軽などの東北諸藩を煩わさずに、いっそロシアとの通商を許すべきという考えに変わっていた。

それでも、どうしても重き兵備を置かなければならないというのならば、松前、箱館、江差あたりに置くべきで、この広大な蝦夷地の端々を、冬の間捨て置いても、大勢に影響などない。宗谷に

は数人の番人を置くのみで、多くの藩士たちは、函館あたりまで南下するべきである。と、宇平太は半蔵に言った。

これを受け、宇平太と考えの似ている半蔵は、再び鈴木甚内と話し合う。「詰合ノニ者共 様子ニテハ来春マテニハ大都病死可致(アラカタビヨウシイタスベシ)」このままでは、ただいたずらに藩士達を見殺しにするだけである、冬の間だけでも宗谷から撤退するべきだと、半蔵は訴えた。しかし、その意見は退けられる。結局、重い病気の者だけ増毛や留萌まで帰すことになり、リヤコタンに陣屋を移すという話も、もう今年は間に合わないとして、来年に持ち越されることになった。

以上の話は「内密」だったが、なぜか幕府に詳細にわたって知られていた。

「十一月朔日 甚内様被仰候ハ 其勤番雇足輕ノ内 公儀忍ノモノ(幕府の隠密)入り交り居候事ト被察(サッセラレ)候所ノ様子 不思議ニ巨細(コサイ)上へ相通リ侯 心ヲ入様子見給ヘトノ御内談ノ事」

甚内は、藩士の中に幕府の隠密が潜み、情報を収集している可能性を指摘している。それ程幕府は、北方警備に神経を尖らせていた。

冬の間じゆう藩士達は酷い寒さに晒されることになる。夜具はどうとう充分に行き渡らなかったし、手に入った古着も質の悪いものだった。畳もついに入ることはなく、床の上に薄縁(ウスベリ・縁をつけたゴザ)を敷いて過ごさなければならなかった。

山崎半蔵は、宗谷に来た斜里詰の幕臣最上徳内に「冬分ニ至リ 朝ハ必ス鳥ヲ聞ト等シク起キ好ニテ焚火ニ当リ帶ヲ解キ腹ヲ炎リ背ヲ炎ルは常ナリ」と言っている。

夜のあいだにすっかり冷え切った身体を温めることから、一日は始まった。上士の半蔵ですらそうなのだから、夜具のない下級の藩士達は、もっと大変だった。故郷弘前の冬の寒さとは格が違う宗谷の寒気に、藩士達は激しく動搖していた。

## 5. 浮腫病の恐怖

越冬のため宗谷に駐屯している津軽藩兵達を脅かしていたのは寒さだけではなかった。

浮腫病と呼ばれる病が、多くの藩士達の身体を蝕んだ。この病は「腫レ出シ後心ヲ衝キ落命ニ至ル」と言われ、罹患した者の多くは死亡した。

原因はよく解っていない。当時は寒さが原因と言われていたが、著名な探検家で当時斜里に詰めていた最上徳内は焚き火にあたり過ぎるのが原因としている。現代では浮腫病はビタミン不足による脚気、または壊血病ではないかといわれている。

宗谷では米や味噌、酒などは充分にあった。普段の食事は塩鮭に麩の味噌汁などが主で、塩鮭以外では鱈や鰆などの魚介類でさえ珍しく、野菜は慢性的に不足していた。

半蔵日誌には、野菜の記述が2カ所ある。

「八月二日 宇平太殿ヨリ大鰐節ヘ茄子一箱添贈ラレ皆ニテ用ユ」

「二月廿六日 御役人ヨリ生根(大根)二十本腫病ノ養生トテ贈ラレ用イテ驗アルコト奇ナリ朝鮮人參ノ如ク貴ベリ」

日誌に記すということは、やはり野菜を吃るのは珍しいことだった。浮腫病が脚気や壊血病ならば、大根を吃るのは有効な治療法だが、当時宗谷にいたといわれている200人もの人達すべてに行き渡るには、二十本はあまりにも少ない。

幕府からは宗谷と斜里に、それぞれ八百帖ずつ薬が支給された。香蓄散(朝鮮人參主剤、強精薬)、平胃散という腹薬で、こちらはどれほどの効果があつただろうか。

「八月十七日 病者鳶一人江夫七人御医者添書ノ上帰國願ニ付御役人へ相達シ永喜丸(官船)へ乗セ帰シ侯事」

この頃から、駐屯している者の中から浮腫病の者を官船などに乗せて帰すという記載が多くなる。8月20日(1807.9.21)には最初の死亡者が出た。

「八月廿一日 昨日安房ノ和助腫病(浮腫病)ニテ病死 今日ハ八反田ノ文五郎同断(和助同様浮腫病により死亡)頃日腫病ノモノ多ク困侯事」

この日から翌年宗谷を離れるまでの間に、日誌に記されているだけで32名の死亡者がいる(一名は千歳丸船頭万助)。帰る途中や、帰された先で亡くなつた者達もいるので、死亡者の正確な数は分らない。

「十二月朔日 卒青藤茂作病死共病中看病 御持鑓(主人の槍を持つ役割の者)多作申付侯所 一身掛テ厚ク末期ニ至リ狂氣トナリ 側ニテモ大困リ多作ノ弟ナリ病死モ日々アル如キモ 憐レト泣カヌモノナカリシ」

故郷をはるか遠く離れた宗谷で、命を落とさなければならなかつた弟は、どんなに無念だったことだろう。看取つた兄も、弟が不欄でならなかつた。

日本を護るためにこんな辺境の地まで来たと言うのに、ロシア船はいっこうに姿を見せない。空しく日を過ごしたあげく、何故病などで死んでいかなければならないというのだろうか。この時周りで涙した者達も、明日は我が身と、茂作に自分を重ねたに違ひない。

明けて文化5年。死亡者はさらに増える。正月4日、半蔵、藩医佐々木元龍、足輕目付成田勝左衛門、貴田十郎右衛門の四人で病人改めをしたところ、重症者だけで54人もいた。貴田自身も浮腫におかされていた。宗谷での越冬は無謀だった。連日増毛、留萌あたりまで病人を帰してはいたが、冬場のこと、海路は絶たれ、陸路で行くも難渋し、病人には辛い道中だった。途中で命を落とす者もいたが、それでも宗谷に居続けるよりもはるかにましで、無事に増毛や留萌までたどり着き、そこで養生できた者は快方に向つた。

大変だったのは、病人だけではない。道中付き添うアイヌの人達もまた大変だった。当時蝦夷地にいた和人達は、例外なくアイヌの力を必要とした。生活全般の手助けに加え、病人の付き添い。移動の際の荷物持ちなどのほか、ロシア船が来た場合など、共に戦うことまで義務付けられていたこともあった。

松前藩の統治時代、狡猾で残忍な運上屋の支配人などに虐待され、搾取され、アイヌの人口は激減した。そのうえ和人等が持ち込んだ伝染病などに感染し、さらに人口は減少した。幕府が蝦夷地を直轄地にした理由は蝦夷地警備のためだが、ひとつは松前藩に奴隸化されたアイヌに対しての「介抱」と「撫育」のためだった。

アイヌ社会へ便宜をはかり、恩恵を与えるためと言うがそれは建て前で、本当のところは、松前藩に反感を持つアイヌがロシアに懷柔されるのを防ぐためである。

ここはアイヌの大地だった。「蝦夷地」「北海道」という言葉であらわされているこの土地は「アイヌモシリ」である。アイヌは国境という概念もなく、独自の宗教と文化を持ち、和人が入つて来る以前から、この地で暮らしていた。後からきた者達に奴隸にされる筋合いもなければ、「撫育」などされる必要もない。幕府役人の中には、アイヌに同情的な者達も多かつたが、その考え方は主觀的

で、アイヌの身になって親身に考える者は少なかった。

それでもアイヌの人々は、和人に親切にした。この後明治の開拓時代まで、アイヌに助けられた和人は多い。寒さと病気は、藩士達の気持ちを挫けさせた。

2月10日には「腫ナキハ予ト予カ僕与三郎ト両人ノミナリシ」と書かれている。はっきりとした記録はないが、だいだい200人いたといわれている宗谷の人口のうち、浮腫病に罹患していないのが僅か二人だけというの大変なことである。

その頃、斜里でも宗谷同様浮腫病による死者が出ていたが、こちらは駐屯している100人全員が罹患し、72人が死亡するという、宗谷以上の凄惨さだった。

## 6. 生活の中の楽しみ

藩士達にとって、宗谷での生活は辛く厳しいものだった。しかし日々の暮らしの中にはそれなりの楽しみもあった。

7月5日には「詰合御人数(津軽藩士)為氣晴七夕祭(タナバタマツリ)ノ形行度旨申シ出ニ付 宇平太殿へ及内達候事」と書かれている。

誰かが藩士たちの気晴らしに、七夕祭りをしたらどうだろうと半蔵に言ってきた。半蔵はそれを深山宇平太へ伝えたが、宇平太はどう応えたのだろうか。

7日に実際に七夕祭りをしたのか、日誌には記されていないが、詰合いの藩士達に「気晴らし」が必要だと考えられていたことがわかる。

江戸時代の七夕祭りも今と同じように、色とりどりの紙でできた飾りや、願い事を書いた短冊を籠の枝に下げていた。また弘前ではこの時代、七夕にさまざまな形の灯籠の行列が練り歩く「ネブタ」の記録があり、もし宗谷で七夕祭をしたとしたら、どのような形でしただろうか。

12月9日には「寒中為御役人へ出 御人数三味線歌等勝手次第(自由にしてよい)被申付候様トノ事」ともある。

吹雪の日は外へ出る事もできず、戸を閉め切った暗い中、灯火だけで終日過ごす事もあった。そんな時、三味線や歌にどれだけ慰められたことだろう。

声問川右岸2遺跡からは、18～19世紀の遺物が発掘されている。大陸から渡來した青銅製の着物の裾飾り、ガラス玉などの他、江戸時代本州で造られた金属製煙管や「寛永通宝」などと共に、火縄銃の弾も見つかっている。

湖沼があり、湿地帯の広がる声問地区は、多くの鳥の繁殖地であり、渡り鳥の中継地でもある。シギ類やカモ類も多い。

この声間に、鉄砲方などが「気晴らし」のため、鳥撃ちに出掛けたりしなかつただろうか。発見された火縄銃の弾には、発射された形跡があった。鳥撃ちした時の流れ弾かもしれない。撃った鳥は汁物にでもして食べただろうが、食料を手に入れるというよりは、「気晴らし」に鳥撃ちしていたような気がする。

上士である山崎半蔵と、貴田十郎右衛門は観光(?)もしている。

「十二月四日 晴 リヤコタン(富磯)ニ獅子送りアリ 貴田始メテナレハ 予同伴シテ見物セン事」。当時リヤコタンは近隣のアイヌの人々の越冬地だった。獅子送りとは、神送りとも言われ、アイヌ語でイオマンテ。アイヌの冬の大切な神事である。

アイヌの人々の風俗を描いた「アイヌ絵巻」なるものが、江戸時代の人々の人気を得ていたが、イ

オマンテはその主軸となるモチーフだった。普通絵巻物でしか観られないものを、実際に観る事が出来るとなれば、大喜びで出掛け行つただろう。

正月14日には貴田と海辺へ出かけ、景色を眺めている。

冬場のことでの、空気が澄んでいて、雪を頂いた利尻山は美しく見えた。

「望遠鏡ニテリシリ嶽ヲ望ミシニ 奇絶造化ノ妙 言語ニ絶タリ」と、感嘆している。

文化4年8月、宗谷に初めて馬が30頭送られて来ていた。馬が来た事で、移動が大変楽になっていた。この馬で、リヤコタンや景色のいい海岸などへ出掛けたのだろうか。

過酷な生活の中、少しでも楽しみを見つけていたのかと思うと、読んでいくらか気持ちがなごむ。



宗谷岬を望む

## 7. 待ち焦がれていた春

やがて季節はめぐり、春のきざしが見え始め、宗谷は賑やかになってきた。

「三月十二日 公儀ノ団合舟 御雇同心間宮林蔵 番人万四郎ト兩人來ル」

既にこのひと月前、宗谷詰の役人松田伝十郎と共に権太探検に赴くため、間宮林蔵が宗谷に来るという連絡が入っていた。

山崎半蔵と間宮林蔵は、数年来の友人だった。

知り合った当所、林蔵は幕府役人である村上島之丞の従者として、蝦夷地をまわっていた。林蔵は毀譽褒貶(キヨホウヘン)の激しい人で、偉大な探検家と評価される反面、幕府の隠密として活動し、シーボルト事件に関わったとして、冷徹・陰険と非難されたりもしている。

シーボルト事件では、密告の張本人とされているが、これは噂の域を出ていない。仮に密告したとしても、シーボルトに関わる人達を陥れようとしたというよりは、幕府に対して告げるべきことを告げた。自分がするべき事をした、と言うことではなかっただろうか。林蔵は村上島之丞の他に、伊能忠敬や、幕府雇医師久保田見達などに愛され、信頼されていた。

山崎半蔵も、終生林蔵を尊敬し続けた。それ程の人物である林蔵が、冷徹で陰険なだけの人物であるとは思えない。

林蔵は紗那襲撃事件の際、戦わずに逃亡したことをおのれの恥辱として決して忘れない。紗那では、林蔵は最後まで戦おうとしていた。しかし、幕府役人が退却を命じたのである。激しく抵抗したが、幕府に雇われている身分にすぎない林蔵は、結局命令に従うよりしかたがなかった。それでも、戦うべき時に戦わなかった……という思いは林蔵を苛んだ。

そんな林蔵に、権太探検の命が下る。林蔵は、今度こそ責務を果たそうと奮い立つ。

林蔵は後年山崎半蔵に、紗那での経験がなかったら、権太探検の成功は疑わしかったと語っている。二度と後悔するまいと言う気持ちが、林蔵の心の支えになり、間宮海峡発見という偉業を成し遂げるに至ったのだ。

山崎半蔵と間宮林蔵とのつきあいは、晩年まで続く。林蔵が弘前の近くまで来る時は、半蔵の家に寄り、半蔵が江戸に行った際には、林蔵を訪れている。

天保2年の秋、半蔵は江戸にいる林蔵を訪ねた。この頃林蔵は、長崎に手配して、四書を手に入れていた。

四書とは「大学」「中庸」「論語」「孟子」からなる儒教の經典である。

林蔵は水戸公から、家中で用いるために、四書を活字版にして欲しいと依頼されていて、版本の彫刻に取りかかっていた。

5年後半蔵が再び林蔵のもとを訪れると、ようやく版本は出来上がっていた。気の遠くなるような作業を、5年も費やし成し遂げた根気も素晴らしいが、彫りあがった版本の出来映えは職人も及ばないほどだった。ちょうど試し刷りした「大学」があったので、林蔵は半蔵にどうぞと手渡し、四書のうちどれでも、刷ってあげますから、遠慮なく言ってください。国もとに同好の人がいるなら、その人にも贈ってあげればいい。と、たいそう気前がよかつた。

この時の水戸公とは、水戸藩第九代藩主徳川斉昭で、この斉昭の7男が最後の将軍徳川慶喜である。徳川慶喜は子供の頃、水戸の藩校「弘道館」で「論語」などをよく学んだ。林蔵が刷り上げたもので勉強していたのだろうか。そう考えると、ちょっと面白い。

「三月廿一日 未申(ヒツジサル)ノ風強シ雪能(ヨ)ク消ル」

「三月廿九日 晴 鶯ノ初音ヲ聞ケリト申者アリ 今晚五ツ頃 初メテ鰐(ニシン)寄トテ村方騒賑々シ」

藩士達は鶯の初音を、どれほどの歓びをもって聴いただろうか。はたしてその晩、鰐の群来があった。

宗谷にいるすべての人たちは、春の到来を実感した。帰国の日は近い。

「四月十二日 公儀並に諸家様御人数 多勢渡海ニテ大混雑」

幕府及び各藩の役人と下級藩士達が、続々と宗谷にやってきた。狭い宗谷は急に人口が増えた。そんななか、4月13日(1808.5.8)、松田伝十郎と間宮林蔵は樺太へと渡っていった。この時、山崎半蔵は、松田と林蔵の従僕となって、一緒に樺太へ渡りたいと申し出るが、その願いは叶えられなかった。

17日には、宗谷での指揮を鈴木甚内から引き継いだ、松前奉行吟味役高橋三平が、1,700石積みの官船「瑞祥丸」に乗って着任し、津軽藩士と交代する会津藩士106名も、この日宗谷に到着した。

そしてついに、4月18日(1808.5.13)、宗谷の津軽藩士に引き揚げ命令が下った。

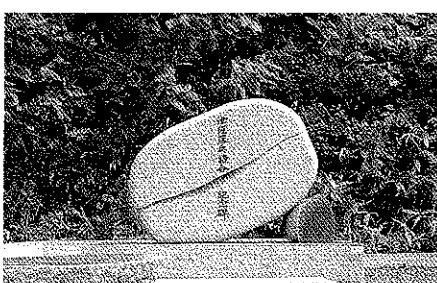
長かった宗谷での生活もついに終る。

「四月廿二日 晴 自分ソウヤ出立ノツシヤフ(ノシャップ)寓(ヤド)リ 難ヲ経ズンバ曷(イズクン)ソ易ヲ知ラント 誠ニ快カリキ」

苦難を経たからこそ味わえるこの喜び。本当に気持ちが良い。

この明るくさわやかな文章には、一片の感傷もないかのように見える。しかし、苦難という言葉だけでは表せない思いが、半蔵や藩士達の胸にはあったに違いない。

出立にふさわしい晴天の空の下、帰国の日を待ち焦がれながら、宗谷の地で命を落とした藩士達の魂魄(コンパク)も、この日皆と共に帰路についたと思いたい。



津軽藩兵詰合の記念碑

この年の暮れ、幕府は蝦夷地の警備を担った津軽藩に、三万石の加増をおこなった。あまりにも多くの犠牲の代償として。また、宗谷歴史公園にはコーヒー豆の形をした「津軽藩兵詰合の記念碑が建立されている。

(2008.8 訳・文 高山理恵)